志向性

木村慎哉

一

『心的現象 sychische Phänomene』と自分の呼ぶものの本質を求めて Brentano が『志向性』の考えを摑み、Meinong と Husserl とがこれを継いで詳しく展開して行ったことは、周知の如くである。しかし経験論や実証主義の流れを汲む大方の者は、意識の志向性というものを凡そ考慮せぬか拒絶するかした。主な理由として三つ程考えられる。第一に、物的機制に還元されぬ『心的機制』を云々するのは、科学的研究の大勢に背く蒙昧主義である。第二に、『内観』や『直観』に基づくと称せられる報告は、客観的意味を欠く空語である。第三に、『内在的客体[1] immanente Gegenstände』を認めることにより、客体の馬鹿馬鹿しい氾濫が起る。

最後の点に関しては、Russell の Meinong 批判が余りにも有名である。彼は次のように言った。Meinong は、『黄金の山』や『円い四角』等について語ることができ、これらを主体とする真なる命題を作ることができるから、これらは或る種の論理的有 logical being をもたねばならぬ、さもなければこれらの起る命題が無意味となるのであ

ってみれば、と論ずる。こうした理論には、最も抽象的な研究にさえ保たるべき実在への感覚 that feeling for reality が欠けていると私には思われる(2)、云々。しかし Russell の曲解が指摘されている。彼の批判の矢は、Meinong の考えを否認してしまう以前、それに最高の讃辞を呈していた時期の、自分自身の説にしか当らぬ。Meinong は結局『黄金の山』や『円い四角』にいかなる類の有をも認めはしなかった。表象の対象である限りの対象は、『純粋客体 reine Gegenstände』の一種として、『有非有の彼方 jenseits von Sein und Nichtsein』に立つ。一般に客体は本来『脱有的 außerseiend』なのである。そのうちの或るものは実際あるが、残りのもの（『黄金の山』や『円い四角』はこちらに属する）は凡そどこにもありはせぬ。客体を認めることはそれに有を認めることではない、というわけである(3)。

しかし考えれば訝しい。『黄金の山』のような対象を認めぬ者に向かって、その反対の立場はどう表現されるか。『お前は間違っている。そうした対象も認めねばならぬ。何故なら、それは――あるからだ』と所詮言うしかあるまい。認められた客体は、要するに、『ある』と認められたのである。客体を認めることは、それが『ある』と認めることに他ならぬ。この意味で Russell の Meinong 批判は正当な一面をもつ。志向性の認識において Meinong は Russell より正しいと私は考えるが、それにしても、『脱有的』な『純粋客体』の措定をもってことを表現すべきではないのである。いかにも、志向性を論じて行くとき、我々はやがて屢々『黄金の山』や『円い四角』が恰も何らかの対象としてあるかの如く語らねばならぬ。これは我々の言語の所為である。我々の言語がそのようなものだということが、実は意識の志向性の重大な結果に他ならない。しかし『純粋客体』の措定は、言語的結果の単なる存在論的複写にとどまるであろう。そしてこれは何か客体が平板に向こうに並んでいるかの如く思わせ、奥行のある志向性の構造を真正に見る眼を曇らせる。『黄金の山』と考えるとき、我々の意識が或る『純粋客体』に突き当ったり、それを拾い上げたりするわけではない。やや奇妙な言い方をすれば、意識は『黄金の山』-方向を目指す。さてその方向

にはいかなる対象もないのである。一方、『富士山』と考えるとき意識は『富士山』－方向を目指し、しかもこの方向には富士山という対象がある。しかし志向と客体との関係はこう言う程簡単ではない。未だ嘗て誰もそれを十分に解き明さなかったと私は考えている。

客体を目指すとき或る経験 Erlebnisse が現在するのみだと Husserl は強調した。客体が経験され、それとともに、この客体に向かう志向的経験が経験されるわけではない。部分とより包括的な全体との如き意味合いで、ものが二つあるわけでもない。唯一つのもの、即ちその本質的記述的性格がまさに今関っている志向であるような志向的経験が現在するのみである。この経験が現在すれば、そのことによって、志向的な『客体への関係』が成就する。そのことによって、客体が『志向的に現前』する。このような経験が、この自らの志向をもって、客体が存在せず恐らく存在できさえせぬのに、意識のうちに起るということが当然あり得る。客体が目指される。即ち、これを目指すということが経験である。しかしそのとき客体は単に想像されるだけであって、実際には何ものでもないのである、[4]云々。誠にその通りである。とはいえ、私見によれば、Husserl もまた志向と客体との関係を常に正しく見抜いてはいない。本論文に最も関りのある例は、知覚のうちに一様に現れる客観的な白さと、主観的な、連続的に陰翳を変えて行く白さの感覚とを、彼が対立させていることである。私はこれに承服しない。そして知覚的志向の対象の問題を彼が深く考えなかったのではないかと思うものである。[5]

分析哲学者の Linsky によると、Meinong の客体論は言及的表現の日常用法の論理の存在論化 an ontologizing of the logic of our ordinary use of referring expressions に他ならぬのであってみれば、慶賀すべきことに、誠によく常識と折り合うのである。ないものについて語るということを、何の変哲もない日常茶飯事と彼は考える。『それは実際は存在せぬ』と我々が語るのは、まさにペガサスについてである。何かが言及されると主張することと、それがあると主張することは、全く話しが違う。『純粋客体の脱有』は、この常識にことごとしい表現を与えたものに

すぎぬ、と。しかも文脈次第では『ペガサスは存在する』と語るのも正しいと Linsky は言う。何故なら、ペガサスは『ギリシャ神話の世界に』実際登場するからである。勿論我々はこの動物が想像上のものにすぎぬことをよく弁えている。『ペガサスは（神話中に）存在する』と教えるとき、我々は『実在への感覚』を些かも欠いてはいないのである[6]、と。

この日常言語派的議論は、しかし問題の所在に凡そ盲目なものと言わねばならぬ。いかにも我々は生月(いけづき)について語るのと同じようにペガサスについて語る。だが何故同じように語るのであろうか。対象の有無に拘らず、我々の側に何か同じようなことが起っているからではないのか。しかも我々はよく現実のものと想像上のものとを区別し得るし、し得ぬ場合には、どちらなのかとの問を発して答えを探り得るが、このとき一体どんなことが起っているのであろうか。その上陳述の主語が必ず何かを指す denote との主張には確かに正しくない面がある。今『隣の人はいやに物静かだ』と言って、実は隣が空家だったとせよ。私は誰についても語っていなかったと言えぬであろうか。思うに、「について」（及びこれに類する語）に二義の区別をすることが重要なのである。第一の意味では、私は隣の人について語っていた。第二の意味では、私は誰についても語っていなかった。さてしかしこの区別の本質はどこにあるのであろうか。こうした問題に答えようとするとき、我々はどうしても意識の志向性というものを考えざるを得ぬ。言語は、或る機制を内蔵して世界の中に置かれた我々の所産である。所産だけを見て、これを産む機制を見るならば、我々の言語活動且つは認識活動の十全な理解は遂に得られまい。

しかし一方で、Chisholm のように、志向性をもつ心理的現象 psychological phenomena があると力説する分析哲学者が出て来ている。その彼も、言語分析から離れたがらぬという分析哲学者の通弊をもち、『志向的な文』の定義から始める。即ち、第一に、単純平叙文は、この文もその矛盾文もそれが含む名前乃至記述の当てはまる何ものかがあるということを含意せず、またないということも含意せぬなら、志向的である。第二に、節を含む非複合文は、

この文もその矛盾文も件の節の真なることを含意せず、また偽なることを含意せぬなら、志向的である。第三に、代入可能性の原則 The principle of substitutivity の成立せぬ文は志向的である。第四に、志向的な文を要素に含む複合文は志向的である。さてこれによって Brentano 的主張が表現し直される。先ず、非心理的現象を記述するのに志向的な文を用いる必要はない。単に物理的なことに関する我々の信念は全て、志向的でない文で表現し得る。次に、しかし知覚・想定・信念・知識・欲求・希望等の態度を記述する場合には、志向的な文を用いねばならぬか、非心理的現象を記述するのに用いる必要のない言葉を用いねばならぬ（この言葉の意味を適切に規定しようとすれば、志向的な文に戻ってしまうこととなる）、云々。Chisholm の判定では、今までに知られているどんな試みによってもこの主張は覆されず、こうして心理的現象は志向性という特有の性格をもつとすべきなのである。(7)

日常言語派は Chisholm の議論を認めぬ。この派にとって、実りある哲学的作業とは、人々が話題にする現実、現実について人々のもっている諸概念を、日常の言葉を手掛りに分析すること、Ryle の所謂『概念の論理的地理 the logical geography of concepts』の決定である。この立場からすれば、志向性をもった或る種の心理的現象を示唆すると Chisholm の考える「見る see」という語の振舞方も、『成就語 achievement words』の一つとしてこの語の独特な用法の問題にすぎぬ。(8) 私はこれを採らない。Husserl は『現象学的分析 phänomenologische Analyse』の困難の一つに、心的働きそのものに反省を加えるには、この働きにおいて目指される対象の方へ眼を奪われるという根強い自然的傾向に抵抗せねばならぬことを挙げた。(9) 何十世代にもわたる生活の場で、確かに日常言語は鍛えられ、現実に即応する論理を獲得したであろうが、また何十世代にもわたって、普通人は、多分その『自然的傾向』に従い、対象の方世界の方へ眼を奪われて来たであろう。

日常言語派のように矮小化せぬ形で Feigl は言う。思考・信念・欲求・感情等がどうして何か*について*であり得るのかとの問に物理的な解明が与えられぬのは、人間の行動が物理的な説明や予測を原理的に許さぬからではなく、

『について』ということ aboutness を含む言説が行動的乃至神経生理学的記述の言語に論理的に還元されるか否かが問題だからである。さて、そうした言説が、丁度『べし』ということ oughtness を含む言説と同じく、純粋に事実的な陳述に翻訳することが論理的に不可能だというのは、全く明白と思われる[10]、云々。しかし言葉のみならず、既に知覚や思考が何かについてであろう。この重大な疑問に対しては、Sellars が科学理論の意味論的検討の成果を援用した一見巧妙な答えを用意している。これによれば、思考とは、公開の言語的エピソード overt linguistic episodes をモデルに、『内的な話し inner speech』として、理論的に措定されるものなのである。それは公開の話し overt speech でないものが似得る限りこれに似たエピソードと解せられる。しかるにこのモデルは二重の役割を果す。即ち、それは先ず意味論的に見られる。まさにこの事実から、志向性が思考の必然的な特徴だということになるのである。志向性の諸範疇は、公開の話しについて認識値の観点から epistemically 語る際に我々の用いるメタ言語的な諸範疇以上のものでもなければ以下のものでもない。ところが次にモデルは Ryle 的行動主義的に見られる。意味論的事実と異なり、この方の事実は言語表現に関する意味論的陳述によって主張されていぬとはいえ、含意はされている。そこで思考が因果的連関に組み込まれることとなるのである、云々。類似の答えが知覚についてもなされる[11]。言葉に関する事柄が何故心的働きに関するとされるに至るのかを Sellars は説明しているのであって、この点を別にすれば彼と Feigl との考えは一致する。要するに、言語の意味論的次元では、確かに志向性というものを認めねばならぬ。しかし実在の因果的次元では、我々はとどのつまり一種のロボットかも知れないのである。

我々は冒頭に挙げた三つの疑点の第一に来ている。果して問題は『次元』の違いにすぎぬのであろうか。自然科学的説明の遂に及ばぬ何かが我々のうちに起ってはいないのであろうか。『起っている』と私は言いたい。そしてその核心に意識の志向性を見たい。何故そもそも我々は志向的な言語をもつのか。Feigl や Sellars は答えずに、もつことを前提としている。しかし我々のうちに志向的な働きがあるからこそ、我々は志向的な言語をもつのではないか。

この働きを電子計算機のそれと同じように考えるのは間違いであろう。自分が論理学的・数学的・意味論的規則に従って働いていることを、電子計算機は知り得ぬが、我々は知り得る。志向性の働きは客体化の働きだとも言える。自然科学は客体化されたものに眼を向けて、客体化そのものは論ぜぬであろう。(12)

従って私は Chisholm の遡行を基本的に正しいとする。とはいえ、その『文法的』手続きがどれだけの説得力をもつかは甚だ問題である。二重の意図のからみ合いがここには見られる。Chisholm は、第一に、心的態度の陳述を過不足なく覆う『文法』を求めているらしい（論理学者を悩ませて来たそのような陳述の内包性 intensionality の問題に何らかの光を投げかけようとてであろうか）。この場合、彼の『文法』が果して過不足のないものかとの疑惑が直ちに湧く。しかし当面これに関る必要はない。第二に、彼はその『文法』から意識の志向性の認知が必要なことを示そうとしている（公認の言語分析に基づかせることにより、人の胡散臭がる『志向性』の概念に嫡出証明を与えようとてであろうか）。第一の意図が果されなくとも、第二の意図に従い得る。他の陳述はどうであれ、これがこうした『文法』に合うのは、意識の志向性のなせる業だと言い得ようから。しかしそう言う為には、志向性について『文法』を離れた分析を行っている必要がある。たとえ第一の意図を満たす『文法』が見出されたとしても、単にこれに対応するものとして意識の志向性を要請するだけでは、言葉の言い換えの域を殆んど出ないであろう。

それ故我々は遂に我々の活動の、言語も含めた外的徴表を越えねばならぬ。問題の本質上、直接の証拠は対象の方にでなく、『内観』によって我々の方に求められるであろう。そうしてならぬわけがあろうか。少くとも、周知の如く、『意味の検証原則 the verification principle of meaning』は既に当初の尖鋭な意味を失った。『内観』の必要性があるとき、これをア・プリオリに切って捨てるべきではない。兎も角敢えて冒険をしなければ、一つの問題が答えられずに残るであろう。いつまでも靴を隔てて痒さを掻いているわけにはいかぬ。そのつながりの中で、言語分析も重要な一方法となる筈である。

しかしあと限られた紙面で多くのことは言えないし、細かな研究にはまだ手をつけていないのが実情である。それ故着想の核心だけを述べることとして、その先（特に意味論上の問題が私の本来の関心事なのであるが）はまた折を見て発表したい。

二

この机を見ているとき、私は『本当は』或る種の感覚与件を見ているにすぎぬとか、『本当は』机の表面の一部を見ているにすぎぬとか主張するのは間違いである。今や誰もがそう力説する。例えば Chisholm は語る。『彼は舟を見る』ということから、『舟が或る仕方で彼に現れる』ということ、更に『舟が彼に一つの現れを呈する』ということを経て、遂に『彼は一つの現れを見る』と結論するのは、『感覚与件の誤謬 the sense-datum fallacy』の一例である。これから果ては『彼は舟を見ぬ』とさえ主張されかねない。しかし「見る」の『文法』によれば、明らかに『彼は舟を見る』と言って正しいのである。これを誤りとするのは、『その哲学者はペルーの一部にだけ住んで全部に住まぬのであってみれば、本来いやしくもペルーに住むとは言われぬ』と主張するのと同じである(13)、云々。人は『与件の神話 the myth of the given』を放逐し、現象主義乃至感覚与件説の破産を宣告した。さてしかし、私見によれば、その場合の議論は混乱を極めている。そしてこれは志向性についての認識の欠如の所為なのである。

Chisholm の例で、『彼は舟を見ぬ』と主張するのは勿論正しくない。他方『彼は一つの現れを見る』と結論するのを私は必ずしも不当と考えない。何故これが不当なのであろうか。『彼は舟を見る』と言うとき、言及されているのは物理的対象たる舟であって、現れのことは何らこれに含意されていないからとの理由は採られぬ。いかにも、舟について語るとき、我々はその現れについて語るわけではない。しかし彼は遠くから、また近くから、或いは甲板に立って、舟を見るであろう。いずれにしても彼は舟を見る。とはいえ様々に異なる現れを経てそうするのである。彼

に直接与えられるのはこうした現れだと言ってもよい。その意味で、彼は現れを『見る』。これが「見る」の本当の意味だと主張すべきでないのは勿論である。『本当に』見るのは寧ろ舟なのであろう。一つの知覚における対象とその現れとの関係は、決して二つの対象の間の関係ではない。このことが議論の微妙なところで見落され勝ちなように思われる。こうして、或る者は、現れ（という対象）を見る以上、まさにこの見ることの対象が（もう一つの別の対象たる）舟ではあり得ぬと考え、他の者は、舟を見る以上、まさにこの見ることの対象は舟で尽きていて、現れ（対象でなければなるまいが）はそのもう一つの対象であり得ない（だからない）と考える。しかし知覚の対象とその現れとは、後者を経て前者が知覚されるという関係にあるのである。これは或る点で『指示 reference』と『証拠 evidence』との間の関係に似るであろう。両者の区別は、『検証原則』の後退と現象主義の破産との過程の中で改めて確認されるに至ったのであるが、『ここに宇宙線が走った』という陳述が、証拠については何も語っていないにも拘らず、これと或る種の連関をもつのなら、『彼は舟を見る』という陳述が、彼に対する舟の現れと或る種の連関をもつとするのに不都合はあるまい。後者の連関の如く、前者のそれも言い尽せぬであろう。

しかし両者の間の本質的な相違を Sellars は強調する。宇宙線が走った証拠は、どんなものでも、物理的対象言語 the physical-object language 内で表現し得るのに対し、舟の現れを記述すべき感覚与件言語 the sense-datum language というものはあり得ぬ。物理的対象（科学が理論的に措定したものではなく、日常世界で観察されるありふれた対象）に何かと言及しないで感覚与件（現れ）の有様を述べることはできないのである。これは我々の言語の歴史的な性格の所為などではなく、原理的な問題である。原理的に、物理的対象の枠組を把握していない限り、我々は凡そ何についても語ることができぬ。それ故我々の認識が出発するのは物理的対象からでなければならぬと Sellars は考える。これより前に感覚与件を挿入したがるのが『与件の神話』なのである。却って物理的対象の後に、鏡がものの ないところにものを見せるといった類の一般的事実を説明すべく、『複写 replicas』のモデルに基づいて、『感

覚印象 sense impressions』なるものが理論的に措定される[14]、と。

この説は『言語的観念論』と名付けるのが至当である。『私』が世界を経験し考えるのであってみれば、世界の存在は『私』に依存すると観念論者は言う。即ち認識の順序を存在の順序にすり替える。物理的対象言語が最初にあるからには、認識の出発点は物理的対象にあると Sellars は言う。即ち言語の順序を認識の順序にすり替えるのである。確かに、物理的対象を要に置く世界認識の体系が既に成立していてこそ、あらゆる理論構成も可能であろう。感覚与件説もこの原理的制約を免れることはできない。その意味で、物理的対象から認識が出発すると言い得る。物理的対象の認識の上に立って、感覚与件というものが理論的認識にもたらされたのである。とはいえ、これと例えば宇宙線の認識との間には、認識論上本質的な相違があるとせねばならぬ。我々は宇宙線を推理によって間接的にしか知ることができないが、自分に対する感覚与件は直接に知ることができるからである。Sellars もこれを認めるように見える。知覚や思考は単なる理論的存在以上のものだと彼は言う。何故なら、もともとは単に理論だったのであるが、我我はやがて、自分の公開の行動を証拠として自分がしかじかの知覚や思考をしていると推理することなく、それを記述できるようになるから[15]、と。しかしこの『直接の近づき direct access』を、単に知覚や思考の言語が果すようになった付加的な役割にすぎぬとして片付けるのは採られぬ。言語の順序ではそう言えても、認識の順序では然らざる意味がある。我々は何か直接に近づけるものによって知覚（思考）する。これを Sellars は認める。実際認めねばならぬ。直接に近づけるものが物理的対象でないのは、思考の場合明らかである。知覚の場合、後に述べる如く、直接に近づけるものに、感覚与件とこれに基づくものとを区別せねばなるまいが、いずれにしても物理的対象でないのは、幻覚を考えれば明らかである。それならこうしたものを、『内観的分析』にひっかかるものとして、物理的対象の認識の前に置くのに不都合があろうか。しかも、今問題にしている感覚与件は、心的状態でなく一種の個体 particulars と見て何ら差支えがない。何故なら、それは対象的に意識の眼前にあるからである。これが主観的だとか実在的でな

いとか、従って物理的対象と異なり『本当の』個体でないとかいうのは、また別種の考慮による。こうした議論を下敷きとして、対象的に識別される感覚与件を（対象的に識別される故に）個体的に語るということを不可とするのは、問題の混同である。いかにも、感覚与件は理論的な段階で初めて対象とされるのであって、知覚の当事者はこれを越えた物理的対象を目指す。感覚与件はここで対象的ではあるが、対象ではない。しかし後になって理論的に気付かれたものが、しかも直接に観察される故に、物理的対象の認識はこれをもって正当化さるべきだとの認識論を唱えることは許されてよい。理論的に気付かれぬまま、これが当事者の与件となっていると説くことも許されてよい。事実、物理的対象の認識が、ア・プリオリに与えられたのでなく、流動的な経験を通ずる綜合の結果であることは、否定できぬ筈である。但しここで認識の正当性と成立との二つの問題は峻別されねばならぬ。この混同によって、一方で、件の綜合が何か知的言語的な帰納推理の如く見做されたり、物理学に類した理論構成の如く解されたりし、他方で、そのことを咎めて感覚与件説を否定し去る意見が出て来もする。

ところで感覚与件を認めるとすると、その性質と物理的対象のそれとはどんな関係にあるのか。現象主義乃至感覚与件説の致命的弱点を衝くものとして、この問題が提出される。『古典的』現象主義によれば、机が照明の加減で緑に見えるとき、私は緑色をした（或る形の）感覚与件を得ている。そして机が本当は青いというのは、標準の条件の下で（例えば白昼適当な距離から、色盲や色弱でない者に）青い感覚与件を与えるということである。さて、私はこれを基本的に正しいと考える。但し、正確を期する為、性質に（またそれに応じて形容詞の用法に）『感性的 sensible』と『傾性的 dispositional』との区別をしておこう。ものの現れ方としての性質は『感性的』であり、Locke の意味での『第二性質』は『傾性的』である。Locke はそう考えなかったが、『第一性質』についても『感性的』なものと『傾向的』なものとの平行的区別がなさるべきである。『机が緑に見える』と述べるとき、「緑」の用法は『感性的』である。『机は本当は青い』と教えるとき、「青」の用法は通常矢張『感性的』であろうが、『考えずれ』のし

た段階では『傾性的』ともなる。(16) ここで私は、現象主義が『感性的』用法だけを採ろうとするのには全く同意せぬということを、先ず断っておく。何の遁辞も弄さず、別に『傾性的』用法を認むべきである。物理的対象は決して、『感覚与件の束』でも感覚与件からの『論理的構成』でもなく、文字通りの意味で自存し得るものだからである。ただ私は今特に『感性的』用法に注意を向けている。さて、感覚与件をいかなる傾性ももたぬものとして措定すべきだと私は考えるから、『緑色の感覚与件』を語るとき、「緑」の用法は一重に『感性的』である。これを次に断っておいて、問題点を吟味しよう。

机とその感覚与件とはいかにも同じ範疇に属さぬ。これから両者を同じく『緑』と（『感性的』に）告げてはならぬということが帰結するであろうか。机を見る者は、まさに机を知覚の対象とするのであって、決して机の感覚与件を対象とせぬという事実が、帰結すると考える者の意識を強く捉えているのに違いない。緑に見えるのは机である。他でもなく机が、『緑に見える』。全く正しいこの命題の内容は、それにしても細心に分析されねばならぬ。物理的対象への言及が感覚与件への言及を含意せぬという意味論的事実が、ここで感覚与件を持ち出してはならぬとの主張を必ずしも支持せぬということは、先に大まかに示した。しかし今や問題は更に深く『内観的』乃至『現象学的』分析に関って来るであろう。一方で、手を変え品を変えて現れるのは、いつも同じ机である。それは現れぬという形でさえ現れる。暗くてよく見えぬのは、机に他ならぬ。だから認識の対象は先ず机でなければならぬと Sellars が言った。ところが、他方で、机は様々な現れをもってしか知覚に現れない。この現れは、対象的に、眼前にある。しかも机の表面などではない。普通に机を見ているときはこれを納得するのに困難を覚えるかも知れぬが、今わざと視野をぼやけさせるがいい。このときも勿論机が、ぼやけて見えるのである。しかしまた物理的対象の一部とはされぬぼやけたものが眼前にあるのも確かである。私はこれを『感覚与件』（または、『現れ』）と呼ぶ。その上は、日常言語で物理的対象にだけ関らせられる規定の或るものを、『感性的』に、感覚与件に適用せざるを得ぬ。日常言語にこの種の用

法がないのは蓋し当然である。日常我々は感覚与件に認識の眼を向けぬのだから。ここで範疇の根本的相違を援用するのは、遅ればせの悪しき哲学的議論である。論者は上述の『板挟み』を正しく解決することができず、感覚与件を否定し去ってそれから逃れようとし、さてこの手続きをできるだけ尤もらしく見せかける為、そうした議論に一つの助けを求めている。『板挟み』の解決は本論文の目的の一つをなす。

感覚与件を否定する議論は、いずれも何らかの考えの混乱に基づいているのでなければならぬ。何故なら、感覚与件があるのは事実だからである。或る議論は他のものより論駁しにくいかも知れぬ。しかしいずれ論駁さるべきである。私は、どの感覚与件についても、その商品が『すっかりショー・ウィンドーにある』と考える。さもなければ第二の物理的対象を措定したことになってしまう。そうすると、『数あると見えるが、何本あるとも見えぬ虎の縞』の問題はどうなるか。物理的対象と違い、縞を何ら一定数もたずしかも数もつ感覚与件を語るのに矛盾はないと、Ayer は答えた(17)。しかし、いくら感覚与件であろうと、最も基本的な論理を犯せば矛盾である。恐らく Ayer はここで、(一定数の観念でなく、唯の)『数』の観念に引きずられている。この観念によって、特に一定の数について考えることなく、数一般について考えることができる。それにしても、勿論、数一般という数はない。解答は、注意や思考によって捉えられぬまま、感覚与件が直接(ある通りに)与えられ得るというだけの話しである。何故そうであってならぬか。ここで無用の紛糾を招かぬ為に、認識の正当性の問題と成立の問題との区別をはっきり意識すべきである。認識の正当化の為に感覚与件が求められるのなら、気付かれぬ何かを(しかも隠さずに)もった感覚与件というのはいかにも具合が悪かろう。しかし感覚与件にそのような役割を果させようとすることの不当性が、現象主義の破産によって示されたのである。解答にもう一つ付け加えれば、虎の縞の感覚与件は実際流動的で輪郭のぼやけたものなのかも知れない。すると、それを『虎の縞』という輪郭のはっきりした概念で考えようとするのが間違いなのである(感覚与件が、それなりに、刻々と一定でないということをこれは意味しない)。

感覚与件は『向こう側』をもたぬ。これに対して Chisholm は難ずる。感覚与件が果して実際、関係する物理的対象のそれかどうかと問うて見よ。件の感覚与件が背面をもつかどうか決めることによってしか、この問に答えられまい[18]、と。しかし物理的対象の背面を決定する別の感覚与件と件のそれとが、或る種の関係にあるというだけの話しにすぎぬ。

机とその感覚与件とが同じく緑であり得るとすると、後者が前者を『模写』するという古臭い説にならぬか。眼前の感覚与件に対して、もう一つこちら側（恐らく頭の中）に、『緑色をした感覚印象』を考えるのなら、その通りである。しかし私は眼前の感覚与件だけを措定している。そのとき机とこれとが同じく緑なのは当然なのである。何故なら、我々は他でもなく後者の（『感性的』）性質を前者の『感性的』性質としているから。実際、無反省的意識にとって、後者と前者の表面とは区別されていない。我々は、日常、状況に従い無限に変転する視覚への現れを、同一の物理的対象の表面と『思う』。自分の眼の所為でぼやけた感覚与件でさえそうである。それが不都合だとは意識されない。我々の目指すのは物理的対象自体だからである。移ろい行く現れを経ながら、物理的対象自体が、遙かに確固たるものとして目指されるのである。日常言語はこの事実を体現している。即ち、『机がぼやけて見える』。更には、『机がぼやけている』。しかし反省的理論的意識にとっては、客観的空間に自存する筈の机が、或る者の眼の都合で実際ぼやけるというのは背理である（客観的空間の論理に反する）。それ故、一般に机の感覚与件は机の物理的な部分（表面）でないと結論されねばならぬ。机は感覚与件を経て現れるであろう。後者の（『感性的』）性質に基づいて、前者に『感性的』性質が付与されるであろう。しかし両者は遂に別のものである。机は感覚与件を経て目指される『何か』なのである。対象たる感覚与件のこちら側に『感覚印象』があるのではなく、寧ろ、対象的ではあるが対象ではない感覚与件の向こう側に対象がある。だからこそ『机がぼやけている』と言うのであった。この対象と感覚与件との関係は、凡そ『模写』のそれなどでなく、まさに対象とその現れとの関係なのである。

感覚与件を否定する議論にはこれ以上かかずらうまい。今や志向性を直接論ずべきときである。

三

机が緑に見えるとき、私は緑色をした（或る形の）感覚与件を得ている。この感覚与件は対象ではない。対象として私が目指すのは他ならぬ机である。そしてこのとき、感覚与件が緑であることによって、『机が（『感性的』に）緑に見える（緑色をしている）』。感覚与件を経て、その彼方に、対象を目指すこと、この基本的事実が、知覚をめぐる錯綜した議論を解きほぐすことにより（また敢えて『内観』を加えて）見出される。これを私は『知覚の志向性』と呼ぶ。さてしかし種々の注意が必要である。

目指される対象は『突き当られる』のではない。幻覚の存在からこれは明らかである。対象を目指すとは、言わば或る方向を目指すということにすぎない。それ一個としては、幻覚は真に存在するものの知覚と本質的に何ら異なるところがない。相違は全く外的関係による。マクベスに『見えた短剣』は他の者に見えなかったし、触れることができなかった。それ故マクベスは幻覚を経験した。しかし彼には実物が見える如くに『短剣が見えた』のである。ここは確かに甚だ語弊のある言い方のされる領域である。マクベスは或る方向を目指した。幻覚でなく真なる知覚だったたら、その先に短剣が存在したであろう。実は幻覚だったから、何も存在しはしなかった。ところが『マクベス自身にとっては短剣が存在した』と極く自然に語られる。この『マクベス自身にとっての短剣』まで恰も対象の如く扱って、一般に『内在的対象』が云々される。『内在的対象』は何か影のような第二の対象ではない。それは、実物が存在すればまさにその実物とされようし、実物が存在しなければ凡そ何ものでもない。しかし『内在的対象』が、真なる知覚の場合、実物に一致すると語るのにも注意がいる。一方で幻覚を何ものについてでもないとし、他方で真なる知覚は実物そのものについての知覚とする「について」の用法（第一節で示唆した第二の用法）があるからこう語るので

あるが、何も実物が知覚の働きの一端を構成するわけではない。真なる知覚と幻覚とは志向性において変らぬ。ただ前者は、後者に欠けた或る種の関係を、他の経験に対してもつであろう（以上のようなわけで、『内在的対象』と言わず『志向的対象 intentionale Gegenstände』と言うがいいと Husserl は注意した[19]）。

さて微妙な問題に分け入らねばならぬ。今緑色の感覚与件を経てするこの机への志向は、ア・プリオリに与えられたことでなく、経験における綜合の結果である。結果の内実について混乱に陥らぬようにしよう。私は今『机』と概念的に考えつつ机を目指すのではない。この思考が明瞭に附随している場合は勿論ある。明瞭に捉えられずとも附随しているかも知れぬ。否、我々の知覚はもはや概念的思考と密接にからみ合っているのであろう。寧ろ積極的に私はそう主張する。とはいえ、知覚的志向と概念的（思考的）志向との区別もまた認めねばならぬ。前者において机が把握されるからこそ、『机』の概念も構成されるのである。混乱の第二は、知覚的志向を空間的に解してしまうことである。『感覚与件を経て』、『感覚与件の彼方に』と私はやむを得ず言うが、その語弊によく気を付けねばならぬ。緑色の感覚与件を経て、その彼方に机を目指すとき、私はこの与件の文字通り背後に潜む物質を目指してはいないのである。実際、感覚与件と空間的に直結する向こう側などはない。視覚野は奥行をもつ三次元空間だと言うべきかも知れぬ。それにしても、これは見る者に対する面しかもたぬ空間なのである。触覚野や聴覚野についても同様のことが言えよう。味覚には次元があるのだろうか。あると見える次元は全く触覚野のものではないか。嗅覚は三次元に拡がるとも思われるが、それは視覚野や触覚野から借りられたのではないか。そういえば、聴覚も同断ではなかろうか。大体視覚野も本来矢張二次元でしかないのではあるまいか。このような問は根本的な誤解の産物である。感覚野（視覚野や触覚野等）は、感覚与件の生起によって尽きる。その空間は感覚与件を越えるものを何ら含まぬ。一つの疑問がこのことを感知している。即ち、今手を伸ばして机の表面に触れよ。触覚に与えられた拡がりは、視覚に与えられたそれとともに、同じ机の表面の拡がりだと言う。しかし触覚と視覚とは凡そ種類を異にするのであってみれば、両者に

おける拡がりがそもそも一致し得ようか、と。二種の拡がりに、形式的な共通点はある。例えば（細かい事情は考慮の外に置き）、互に離れた二つの視覚与件には、互に離れた二つの触覚与件が対応するという風に（それにしても、「離れた」はここで同じ意味をもっているのか）。他方、視覚与件のあるそのところにまた触覚与件があると語るのは無意味であろう。念の為、眼鏡をかけた途端にものがずれて見えるという例を挙げておく。それでも我々は、見えるところにものが感じられると告げ、見えるものの向こうに見えない部分があると語る。他でもない、これは我々が一つの知覚空間を形成しているからなのである。視覚や触覚への与件が（夫々に独自の）拡がりをもって分節的なことが知覚空間の形成に本質的だとはいえ、この空間と諸感覚野とは、いかなる空間的位置関係ももたぬ。それを求めるのは凡そ無意味である。知覚空間は、感覚野に現れた感覚与件を経て目指される物理的対象のすみかに他ならぬ。志向的関係で結ばれる対象とその現れとは、同一の空間に含まれない。そう理解せぬ限り、素朴実在論か投影説 the projection theory の不当に陥ってしまうであろう。さもなければ、現象主義のように、口先だけで物理的対象を認めることとなるであろう。[20] 知覚空間は実在的三次元空間である。その中で私は机の向こう側に移動し得る。このとき私の視覚野は先と異なる与件によって構成されるが、知覚空間の認識を獲得している私は、『今度は机の裏側が見える』と報告するであろう。そして勿論、見えるところにものが感じられもする。つまり、視覚と触覚とへの二種の与件を経て目指される同一の対象は、知覚空間の一定の場所を占めるというわけである。

混乱を解きほぐしたとき、知覚的志向はどのように了解されねばならぬか。今緑色の感覚与件を経て机を目指すとき、私は何か机そのものを直接摑みはせぬ。与件を経て目指される対象は、断じて与件を飛び越えて与えられはしない。対象の唯一の手掛りは与件なのである。言わば、対象自体は（これを目指す者に対して）完全に無規定である。即ち、我々は与件を経てただ目指す。意識は与件に突き当ってそれでやんでしまわぬ。それは、与件を唯それだけでないものとして、乗り越える。知覚的志向の方向を定めるのは感覚与件である。しかし感覚与件は対象でなく、通り

すぎられる。『意識は与件を経て『何か』を目指す』とこれを表現しよう。注意せねばならぬが、『何か』と考えて目指すのではない。くれぐれも、ただ目指すのである。そのことによる対象自体の完全な無規定性を、右のように表現するのにすぎぬ。逆に言えば、『何か』が感覚与件を経て知覚に現れる。即ち、感覚与件はそれだけで尽きず（もし対象だったら、尽きるであろう）、『何か』の現れとして意識に起るのである。

勿論、別の意味で知覚の対象は規定されている。この机はかくかくに見え、しかじかに感じらるべきものであり、他の仕方で見えたり感じられたりすべきものではない。とはいえ、これは現れ方の限定にすぎぬ。限定は異なる感覚野に跨って無限に多彩である。その結果として机は知覚空間に位置させられてもいる。しかし遂にこの机は或る種の与件群を経て目指される『何か』なのである（知覚空間は『何か』を容れる空間に他ならぬ）。この、第一の意味での志向対象の無規定性を『原初的無規定性』と呼ぼう。

今机が知覚されるのは、或る種の連関にある与件群が、経験の過程の中で、同じ『何か』の現れと『される』（反省的認識でないという意味で括弧をつける）に至ったからに他ならぬ。勿論、原初的に無規定な『何か』は、それ自体では、互に同じとも異なるとも言えない。二つの与件を経る志向が一点で出合うようになったとき、これらの与件が同じ『何か』の現れと『される』に至ったと言うべきであろう。十全に考えようとすれば、記憶的志向や期待的志向もここに一枚加えねばならぬ。これらの志向は知覚的志向と違った構造をもつが（前者は感覚与件を『建築材 Baumaterialien』として必要とせぬ）、それにしても、『何か』を目指すという点では同じである。古典的経験論がここで『観念連合』を語るのは、或る意味で正しい。とはいえ、これは、寒暖計で温度が高くなるとアルコールの柱が上がるといったような、或いは自動販売機で貨幣を入れると品物が出るといったような、意識内容の、或る規則に従った並列で尽きぬ筈である。私は、自分では何かわけが分からずに、緑色の感覚与件を与えられると、ざらざらした感触を想起（期待）するのではない（そうした場合も確かにあろうが）。『感じられる連関 fühlbarer Zusammenhang』

とHusserlは言った。観念連合で結ばれる二つの意識内容の間には、感じられる連関が湧く。これに従って、一方が他方を指し、他方が一方に属するものとして立つ(21)、云々。この連関の由来を、私は、特に知覚の形成に関係する『観念連合』が問題な場合、意識内容を通じて目指される『何か』を要にこの意識内容が結ばれるところに求めたい。意識内容は、それだけのものとして単に並列的に連合させられるのだとしたら、どうして同じ対象に関ろうか。実に、それらを通ずる志向が同じ一点で会するからこそ、それらが同じ対象に関るのではないか。ここで反省的な同一性の意識を持ち込まぬよう注意せねばならぬ。緑色の見えとざらざらした感じとを同じ机の現れと『する』とき、『見えているものと感じているものとは同じ』と私は反省していない。両者は端的に同一なのである。即ち、二つの与件を経る志向は、端的に一点で出会っている。そしてそのことを私は『感ずる』。これは反省的認識でなく、生きられる経験であろう。このことがあってこそ、『同一性』の概念も理解できるのである。

感覚与件を経る(『何か』への)志向を、Husserlに従って、感覚与件の『対象化的把握 objektivierende Auffassungen』とするのもいい。且つ、意識は決して先ず感覚与件自体を知覚の対象とし、さてそれに解釈 Deutungen を施すのではないと、彼の注意する通りである。但し、彼は『感覚与件』と言わずに『感覚 Empfindungen』と言っている。この違いはともすると重大である。Husserl によれば、感覚は生きられる erlebt werden。しかしこれが或る把握 Auffassen(目指し Meinen)で充たされる beseelt sein と、知覚された対象が現れる。感覚の内容は、それを通じて知覚された対象の内容の類比的な analogisch 建築材を与える。こうして、見られる球の一様な白さと、これに類比的ではあるが決して同一ではない陰翳のある白さの感覚とが区別されねばならぬ(22)、云々。

私の考えでは、感覚与件が感覚の内容である。それは生きられるのではない。それは知覚の対象ではないが対象的である、つまり、知覚において目指される『何か』ではないがまさにその現れであり、これの対象的識別に基づいて『何か』に『感性的』性質が付与されるからである。知覚された対象の『感性的』性質は、感覚与件の

（『感性的』）性質と同一である。球を見るとき、私は陰翳のある白さの他に一様な白さを認めない。そして、球が、陰翳を帯びて白いのである。『一様な白さ』は寧ろ概念的志向の産物であろう（これと知覚的志向とは密接にからみ合っている）。或いは、今は翳った部分の明るく白い見えを想起（期待）することに由来するであろう。思うに、知覚へ現れるところを既に知覚の対象としたことによって Husserl は誤った。その上は、現れへの知覚的志向を定めるものとして、現れのもう一つ手前に感覚内容を想定せねばなるまい。当然これは『生きられる』とされるであろう。Meinong と彼を祖述する Findlay も同じような誤りを犯している。但し、Husserl が『一様な白さ』を対象にもって来るのに対し、後二者は寧ろ、陰翳のある白さの方を対象と見るということになりそうである。即ち Findlay は語る。赤い四角と緑の円とを見る経験を比べるとき、二つの経験が全く記述不可能な質的な仕方で異なるのは疑い得ぬ。円の滑らかな円さに影響される仕方と、四角の直線と尖った角とに影響される仕方とには、何か必然的なものが見えるように思える。緑は同様に赤と異なって『感じる』。そしてこれによって我々は、前者が休息を与えるのに対し、後者は刺激を与えるということでなく、これらの性質が前提とする何か遙かに基本的なことを意味しているのである。赤い四角を見るのに伴うあの奇妙な経験を仮に誰かがするとしたら、彼は、自分の経験を何か対象に向けようとすると、必然的に他の何ものでもなく赤い四角に気付くであろうということ、これは自明な命題のように思われる[23]、云々。しかし私には自明などころか、捏造のように思われる。知覚の対象は、視覚野にある赤い四角を経て目指される『何か』である。『何か』とは、即ち、見る角度を変えても同じな、赤く四角に見える紙（の一部）である。視覚野の赤い四角は、知覚の対象ではないが対象的である。そしてこれは端的に視覚野に起る。その生起が『全く記述不可能な質的な仕方』で他の同種の経験と『異なって感じる』経験に媒介される必要はない。私は無理にでっちあげねばそんなものを感じぬ。実際、赤くもなければ四角でもない『奇妙な』経験から、現に眼前に与えられている赤い四角な拡がりがどうして生ずるのか、甚だ不可解である（私の『何か』は、ただ目指されて、原初的に無規定なことに注意さ

れたい)。Findlay は、また、『拡がりのない不快な生きられる頭痛』と『或る特有な性質が頭の或る部分に間歇的に浸透することに存する頭痛』との区別を説いている。対象たる後者への志向を決定するのが前者であって、両者は相異なる二つのものだ(24)、と。私に言わせれば、頭痛は感覚与件として一つである。ただ、それを経て知覚空間に定位された『何か』が目指されるか否かの相違があるのにすぎぬ。

それにしても、感覚与件が『生きられる』という考えは根強い。感覚与件を経る志向が知覚空間における定位を剝奪されて行くにつれ、ますますそうである。感覚与件の他に、これを『感覚すること(働き)』はないのかとの疑問もここに関るであろう。それはやがて『自己』の存在についての問ともなる。或る者は感覚与件が生きられることを否定するとともに、感覚する働きも『自己』も否定する。Hume は、『自己』と呼ぶものの中へ親しく立ち入るとき、寒暑・明暗・愛憎・快苦等の個別的知覚 perceptions にぶっつかるばかりだと報告し、『自己』を『様々な知覚の束乃至集まり a bundle or collection of different perceptions』にすぎぬと規定したりした(25)。しかし問題の根は深く、まさにそう伝えるとき、彼は『私が』と語らねばならなかったのである。『自己』の存在の問題について論ずる用意は今ないのであるが(形而上学的な意味での『自己』の存在を否定したいとは思っている)、当面の問題について私は次のように考える。感覚与件は生きられぬ。何故ならそれは対象的だから。しかし対象的だとは『何かに対する』ことである。ここに疑似二項関係が成立している。それ故、対象的な感覚与件に対して(これがまさに『前に』あるということから)、もう一方の『項』がこちら側になければならぬ。それは与件の生起に影の如くつきまとう。それは見えぬ壁の如く奥行のこちら側を塞ぐ。それは予感の如く圧迫する。その苛立たしくも(必然的に)対象化されぬ代物は、唯『感じられる』。志向においても、目指される『何か』を向こう側の『項』とする疑似二項関係が成立している。実は、感覚的な疑似二項関係は、知覚的なそれからの理論的抽象である。さて、思うに、『自意識』とはこのこちら側の『項』の『感知』なのである。これとともに、『私が感覚する』ということ、『私が知覚する』というこ

と、『私が志向する』ということも『感じられる』即ち、生きられるであろう。以上のような表裏一体の事態が、人をあれこれと惑わすのである。

四

記憶や期待、また想像、更に思考等の志向性は、知覚のそれより理解し易い筈である。何故なら、志向の対象との関係が甚だ紛わしい感覚与件のようなものが前者にはないから。知覚的志向の特有性は、その対象の現れとなるという仕方で、感覚与件が『建築材』の位置を占めるところにある。記憶的乃至期待的乃至想像的志向において、心像が同じような位置を占めるということがあるのかも知れぬ。そのときは、心像は志向の対象の現れなのである。兎も角、志向の構造からすればそうなる。然らずとするのは、まさに知覚的志向でないとの意識が働いてのことにすぎないのであろう。しかし、少くとも殆んどの場合、心像は志向の線上になく傍にある（思考においてはもう明らかにそうである）。それは必要ですらない。記憶的乃至期待的乃至想像的乃至概念的志向は『建築材』を必要とせぬ。

別の意味でそこに支えはなければならない。第一に、概念は、非概念的志向に基づく抽象である（更に、『考える』という概念などは、概念的志向における『私は考える』ということの『感知』の抽象である）。第二に、例えば数学における如く徹底的に般化された志向でない限り、とどのつまり知覚が、志向に一義性を与えるものとして、関与して来ねばならぬ。このことは、表現にもたらせば固有名を含む志向について最もよく了解される。今火星のことを考えるとせよ。もし地球との位置関係が（暗黙のうちに）認められていなければ、火星は凡そどこにあるとも知れぬ天体であろう。火星自体の概念（或いは、心像）は、それだけで、あの天体への志向を定めるのに断じて十分ではあり得ぬ。どれ程火星そのものの描写を細かくして行っても、この描写に合う天体が時空のどこかに存在するということが、論理的に可能である。第一我々はそんなことをしはせぬ。我々は（暗黙のうちに）地球との位置関係を火星の規

定に加えているのである。ところが地球自体の概念（或いは、心像）もまた、この地球への志向を一義的に決定し得ぬ。こうして遂に知覚に投錨せねばならない。地球は、『足の下に感じられる、或いは窓から見える、或いはこの窓を開ければ見えるであろう大地につながる天体』である。勿論、火星への志向はまた別の様々の経路を辿って知覚に戻るであろう。火星は、『この頭上の空が暗くなったとき（しかじかの場所に）赤く見える天体』でもある、等々。

認識の右のような『自己中心性 egocentricity』を Russell が力説した。それに基づいて彼は『見知りによる知識 knowledge by acquaintance』と『記述による知識 knowledge by description』との区別を設け、後者は結局前者に還元されねばならぬとしたのであるが[26]、ここで『志向性』の概念を欠くため、甚だ理不尽な結論に陥っている。

彼によれば、表現すると「火星」という固有名を含む知識は（有意味な以上）、表現すると（例えば）「頭上の夜空（のしかじかの場所）に赤く輝いている天体」という（確定 definite）記述を含む知識に、正味等しい。或る意味ではそうも言えよう。しかしそれは言語的形式的な整備にのみ関っていて、認識の内実を正面から掴んではいない。これは今特に固有名の『意味』の問題となるが、火星のことを考えるとき、我々は『何か』を目指すのである。そして「火星」という固有名の働きは、この『何か』を何はともあれ指すことにある。『何か』への志向は、必ず何らかの知覚に投錨する様々な経路からなされねばならぬ。既に形成した世界認識の体系に基づいて、我々はこれら様々な経路が同じ対象に至ることを了解するし、知識が進めば、また新しい経路を付け加えるであろう。とはいえ、この経路のことは「火星」の『意味』（少くとも、重要な意味論上の意味での）を構成せぬ。固有名には、何らかの記述で置き換えられるような『意味』がないのである。私は火星のことを、夜空を見上げながら考え、それから家に入って、天文学の本を拡げながら考え続ける。志向の経路は変った。しかし同じ『何か』を目指している限り、私の認識に（一つの重要な意味で）動揺はない。固有名は、我々の世界認識の体系を構成する志向の興味深い結節点を摘出して指す。こうして我々は、Russell 流に（その点では Frege も同様であったが[27]）固有名を記述で置き換えてしまうの

に不満を覚えるのである。

実のところ、固有名のみならず記述についても、それをきっかけとして目指されるものそのものが意識の対象である。だから、甲が『隣の人は』と話し出すのを聞く乙にとって、会話の対象が定まればもう記述はどうでもいいということがある。即ち乙は『君の今話した人は』とか、『うん、あの妙な人物は』とか、『その僕の知らぬ人は』とか言って引き継ぐでもあろう。しかし他方で、何らかの対象的連関を抽象して示す『有意味』な表現を構成要素にもつ記述には『意味』がある（但し、記述が完全に般化されていぬ限り、その了解は『意味』の把握で尽せず、固有名の場合と同じく、最後は知覚に投錨せねばならぬということを注意しておく）。ここで論理的意識が分裂するであろう。例えば『全ての青い机は青い』というのは必然的命題か否か。（この場合現代の論理学が「青い机」を記述と同列に置かぬのは、専ら形式化の上の都合による。志向の見地からすれば、この表現は記述と本質的に異ならぬ。兎も角、問題をできるだけ尖鋭にする為に本例を採ろう）。一見して必然的命題である。論理学も、これを

（x）（xは青い・xは机である⊃xは青い）

の意とすることによってそう見る。しかし必然的でないと言ってよい意味もある。現に青い机が別の色に塗られることは、勿論可能だったからである。この違いは、「青い机」の『意味』（つまり、対象とその性質との連関）に着目するか、それが指す対象そのものに着目するかの違いに基づく。様相論理学の問題点がまさにここにあるのであるが、今は立ち入る余裕がない[28]。「青い机」の『意味』に着目するとき、我々は、改めて机を志向し、それらが青いのだということを考えている。「青い机」の指す対象そのものに着目するとき、我々は青い机を志向しているが、この青い机は現に青いと『される』とはいえ、さて別の色でもあり得る『何か』なのである。志向の働きに素直に従い、改めて考え直さぬ場合は、後の道が採られている（極く日常的な意識にとっても、『全ての青い机は青い』というのは『当り前』である。しかし『必然的』と答えるのはそれよりももっと『考えずれ』のした段階であろう。素直な後の

道を採っても、『当り前』なのである。とはいえ、このように特別な例では、もはや『必然的』と答えて疑わぬ者の方が多いかも知れぬ)。記述(「その青い机 the blue desk」の如き)になると、そのことが遙かにはっきりする。記述を用いるとき、我々はこれが指すべき『何か』を目指し、それについて語ろうとしている。従って、記述を分解し尽して述語に移す Russell の『記述理論 the theory of descriptions』は、日常の言語活動の分析になっていない。この理論を批判して、Strawson が、陳述をなすのに用いられる文を相補的に構成する二種の表現を分けた。即ち、一は言及(乃至同定)の仕事 the referring (or identifying) task を果すのに用いられ、他は限定(乃至記述乃至分類乃至帰属)の仕事 the attributive (or descriptive or classificatory or ascriptive) task を果すのに用いられる。二つの仕事は区別せねばならぬ。所謂記述は第一の仕事に用いられる。これで定められた対象について語るのが、第二の仕事なのだ[29]、と。このとき彼は日常の言語活動に即応した分析を試みているのである。但し二種の仕事の必要なことに超越的な由来などないと彼は断り書をつけるが、私は志向性という一種の『超越性』を見る。論理学の見地からすると、『記述理論』は重要な業績であって、そのことまで否定してしまうのは許されない。しかし意味論の見地からすると、甚だしい混乱が Russell にあり、しかもこれに基づいて『記述理論』が創始されたということも事実である。その一端にはやがて触れる。

記憶的乃至期待的乃至想像的乃至概念的志向が、(完全に般化されていぬ限り)一義性を知覚に負うということは、そうした志向がとどのつまり知覚的志向に還元されてしまう(これの何らかの変形である)ということを意味しない。知覚は箍をはめる。我々は知覚的環境に我が身を置きつつ様々に志向する。しかしこの志向によって我々は直接の環境を越え得る。これこそまさに志向性の本質なのである(既に知覚的志向が感覚与件を越えるものであった)。記述の『意味』と対象との関係についても、似たことが言える。例えば「夜空(のしかじかの場所)に赤く輝く星」という記述をきっかけとして志向するとき、我々の意識は「夜空」や「赤」や「輝く」や「星」の『意味』とその連関と

に、恰もこれらが対象であるかの如く、ぶっつかってあがきはせぬ。我々は『何か』を目指す。そしてそれが、夜空に赤く輝く星なのである。

念の為、少し詳しく語ろう。一日、久し振りに友人に会おうと思い立って、私は出かける。病気が治って退院したばかりと聞くが、様子はどうだろうか。冴えぬ顔色をしてはいまいか。昔のように屈託なかろうか。しかし折悪しく不在でなければいいが、等々と考えて行く。友人はいた。そう、別にやつれてもいない。一寸極り悪そうなのが病後らしい。目指す当人に会えて安心しながら、私は咄嗟にそう判断する。

道々考えていたとき、友人は眼前にいなかった。今彼はにこやかに私と向かい合っている。しかし二つの場合で私の思考（乃至記憶乃至期待乃至想像）の対象に違いはない。また思考（乃至記憶乃至期待乃至想像）の対象と知覚の対象とに違いはない。道々考えていた対象は、他でもなく今や眼前にした相手なのである。私は何の躊躇いもなく、『君について途中色々想像して来たんだが』と言い始める。

これで（願わくは）明らかな如く、我々は直接性の牢獄に閉じ込められていない。我々は志向性によってそれを脱出し、世界認識の体系を獲得するのである。このことを Russell は見逃した。『我々の理解できる命題は全て、我我が見知っている構成要素だけから組み立てられていなければならぬ』という彼の『見知りの原理 the principle of acquaintance』[30] は（色々の問題点はあるにしても、兎に角）首肯し得る。しかしまた、我々の意識は常に『見知り』の彼方を目指し、そこに認識を結節させるのである。

Russell の奇怪な結論は次のようなものであった。我々の知識は、現にそうであるより遙かに遠くまで経験を越えて延びるかに見える。今君が甲夫人を見知っていて、その母親の乙夫人を見知らぬとせよ。このとき、『乙夫人は金持だ』と言う君の意図と正味の主張とは根本的に食い違うのである。君は乙夫人その人について語るつもりである。しかるに、実は『甲夫人には金持の母親がある』と主張しているにすぎぬ。君は、正しく言うと、乙夫人その人につ

いて文字通り知らぬのである（しかも、甲夫人についても厳密にはそうである。何故なら、君が真に見知っている人間はたかだか君自身に限るから）[31]、云々。

好意的に解釈するなら、認識における『見知り』の必然的な介在を、Russell は鬼面人を驚かす仕方で気付かせようとしている。しかし実際のところ、彼は文字通りの意味をこめて我々の『無知』を唱えているのである。結論の理不尽さはまさに帰謬法的に彼の認識論の誤りを証明する。乙夫人（また甲夫人、実はそもそも私自身、何故なら私自身の本質をなすものとして『見知られる』何かはないから）についての私の知識は、正味、私が『見知る』もの（専ら感覚与件）の或る種の連関の知識である。これ以外に「乙夫人」という言葉の意味は（私にとって）あり得ぬ、と。してみれば、私は乙夫人のことを『意図する』ことさえできぬ筈である。また『乙夫人について文字通り何も知らぬ』という命題が何を意味するのか凡そ理解もできぬ筈である。Russell によれば、我々は『見知り』の対象に頭をぶっつけて徒らにあがく存在となる。しかるに実は『見知り』を越えて対象を目指すからこそ、我々は彼の主張も（それなりに）理解し得るのである。

先へ進もう。知覚的志向以外の志向の対象は、（少くとも殆んどの場合）その志向において現れぬ。ここに感覚与件のような『建築材』はないからである。しかし志向は定まっている。志向を定めるものとして『内容 Inhalte（Husserl の用語では Materien）』なるものを考えねばならぬであろう。議論は次の一つで十分である。私は『黄金の山』のような対象をも目指し得る。『黄金の山』はどこにもないのであってみれば、それ自体として自立的に私に向かうとするわけにはいかぬ。実は私が或る方向を目指すのみである。従ってこの方向を定める何かが私の方になければならぬ。それを志向的働きの『内容』と呼ぼう。『内容』は何ものかである。『黄金の山』は何ものでもない。『内容』を通じて『黄金の山』が（恰もあるかの如くに）目指されるのである。しかし現にある対象を目指す働きと、凡そない対象を目指す働きとは、本質的に異ならぬ。従って現にある対象への志向も『内容』を通じてなされる[32]、云々。

実際、目指す方向が束ねられ、(意識的にせよ無意識的にせよ)『存在裁可』されて行って、世界認識の体系が成立するのである。知覚が既にそういうものであった。他の志向、特に概念的志向は、知覚的認識の成立を基礎とするであろう。例えば、家や道が知覚の対象として結実し、それに基づいて(程度の差はあれ抽象的な)『家』や『道』の概念が獲得されていなければ、「右の道の突き当りの家」や「左の道の突き当りの家」といった記述をきっかけとして概念的志向が行われることはできぬ。ここで知覚より高次の『存在裁可』がなされる。即ち、(調べてみると)両方の道の突き当りに家はあった。しかも同じ家であった。ささやかながら、二つの概念的志向は束ねられ、地理が正確になったのである(同じ家でなく、二つの志向を束ねてはならぬということが分かれば、それはそれで勿論新しい認識である)。ここに恐らく反省的な同一性の意識が起っているということは、普通の知覚的認識の成立と異なる点である。しかしこの意識は、志向の端的な邂逅の生きられる『感知』を下敷きとしているのでなければならぬ。さもなくてどうして『甲は乙と同一』という命題が理解されようか。我々は『この机はこの本と同一』という命題を理解し得る。何故なら、『この机はこの本と同一でない』という否定命題を理解するから。前者は理解し得て、偽なのである。してみれば、これが真だとはどんなことなのかも理解し得るのでなければならぬ(別の論じ方をすると、『『この机はこの本と同一』という命題は偽である』ということを理解し得るのであってみれば、『『この机はこの本と同一』という命題は真である』ということも理解し得る筈である)。どうしてそうなのか。原初的に無規定な『何か』が(当座)一つに重なるのを生きること(『感ずる』こと)以外に、私は答えを見出さぬのである。

志向的働きの『内容』を対象と区別して取り出す議論には次のようなのもある。『内容』は必然的に心的である。しかるに、例えば『黄金の山』には心的なもののもち得ぬ物的性質が付与される。故に、一般に、志向的働きの『内容』と対象とを区別せねばならぬ、云々。[33] しかし感覚与件が(『感性的』)拡がりをもちながら『心的』であり得ることには注意すべきである。これを対象として目指す為の『内容』をもう一つ手前に求める間違いは先に指摘した。し

かし感覚与件は知覚的働きの『内容』ではないであろう。それは現れとして対象的であるが、『内容』は対象的ですらない。知覚的働きの『内容』は、我々をして『何か』へと感覚与件を越えさせるところ（Husserl の所謂『対象化的把握』）に求むべきであろう。

『内容』の認知の必要性を説く議論には、考えると奇妙な点がある。実はそれが意識の志向性をよく示している。即ち、議論は対象の他に『内容』を認めさせるのに苦労している。まるで対象の方がはっきりと意識に向かって姿を現しているかのようである。まるで対象はあそこにあるかのようである。『脱有的』とすることで背理を逃れようとしつつ、この不抜の感じに摑まえられて、Meinong は『純粋客体』を語った。Russell もまた、Meinong を褒貶しつつ、己が意識の志向性の魔力から遂に自由になることができなかったのである。例えば「現フランス国王は禿だ」という文を理解するとき、『現フランス国王』なる対象が何かあそこにあって、それが『禿』と言われているように感じられる。そこで Russell は一度『現フランス国王』は或る種の有をもつと考えた。しかしこれでは『実在への感覚』に余りにも無残に抵触する。それにしても、件の文は、このままの形である限り、或る種のあり方をする『現フランス国王』なる対象について語ることになるとしか彼には考えられなかったのである。こうして彼は『記述理論』を武器に、「現フランス国王」という記述を是非とも雲散霧消させてしまわねばならなかった。[34] 正しい解答はこうである。我々は件の記述をきっかけとして（或る『内容』を通じ）志向する、即ち、『何か』を目指す。そして『それ』を禿とする。しかし志向の先に、記述に合うような対象が実際ある必要は更にないのである。我々は第一節に述べた「について」の第一の意味でフランス国王について考えるが、第二の意味では、何ものについても考えていないのである。

知覚的志向以外の志向の対象（『何か』）は、（物理的対象である限り）知覚的志向の対象と同種である。しかし知覚的志向では対象の現れが既に与えられているのに対し、その他の志向では、対象の現れも（対象的なものとして）

副次的に目指される。飽くまで副次的にである。我々は、例えば、青い感覚与件ではなく青い机を目指すであろう。この机が既に現れに関する多彩な限定を施された『何か』であることも注意しておく。

Sellars は自分の『直接実在論 direct realism』を一種 Kant 的な意味で現象にすぎぬ知覚世界に関るものとして、実在を科学理論の語る世界に求める。[35] しかし二つの世界を別々の対象界として峻別するのは私の組せぬところである。『直接実在論』はこれを峻別せねば成立せぬが、峻別しても、知覚世界の事象は物理的対象を主体として語られるという文法的事態の皮相な解釈にすぎぬ。確かに私は『この机は青い』とか『この机は緑に見える』とか言わねばならず、これらの言明を感覚与件を主体にして言い換えることができぬ。それにしても、標準の条件のもとでは青く見え（このとき私は『机は青い』と語る）、標準をはずれた条件のもとでは緑に見える（このとき私は単に『机は緑に見える』と語る）ことと、机自身とはどんな関係にあるのか。これを私は飽くまで問題とし、現れとそれを経て目指される『何か』との関係を認めるのである。さすればまた、二種の志向において目指される『何か』を、知覚世界と科学理論の世界とに共通の対象と考えて不都合はないであろう。

（1）Meinong の Gegenstand に当るものを『客体』、Objekt に当るものを『対象』と言っておく。客体には、（普通の意味の）対象の他に、『事態』(Meinong の Objektiv、Husserl の Sachverhalt) が含まれる。但し本論文では専ら対象のことを考察する。

（2）Russell, *Introduction to Mathematical Philosophy* (London, 1920), chap. XVI, p. 169.

（3）cf., e. g., Findlay, *Meinong's Theory of Objects and Values* (Oxford, 1963), II, I: Linsky, *Referring* (London, 1967), II. Meinong, *Über Annahmen* (Leibzig, 1910), SS. 79–80.

（4）Husserl, *Logische Untersuchungen* (Tübingen, 1913), Bd. II, Teil I, V, Kap. II, SS. 372–3.

（5）第三節参照。

（6）Linsky, ibid., II & VI & VIII.

（7）Chisholm, *Perceiving: A Philosophical Study* (Ithaca, N. Y., 1957), pt. III, 11. 或いは、Chisholm, "Sentences

"about Believing," *Proceedings of the Aristotelian Society*, 56 (1955–1956). 彼はまた志向性の『文法』を摘出する別種の試みも行っている。cf. Chisholm, "On Some Psychologica Concepts and the "Logic" of Intentionality," Castañeda (ed.), *Intentionality, Minds, and Perception* (Detroit, 1967).

(8) cf. Ryle, *The Concept of Mind* (London, 1949).

(9) Husserl, ibid., Einleitung, SS. 9–10.

(10) Feigl, "The "Mental" and the "Physical"," Feigl, Scriven & Maxwell (eds.), *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. II (Minneapolis, 1958), p. 417.

(11) Sellars, "Phenomenalism," Sellars, *Science, Perception and Reality* (London, 1963), p. 87 ff.; "Empiricism, and the Philosophy of Mind." ibid., p. 178 ff.: Chisholm & Sellars, "Intentionality and the Mental," *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. II, p. 521 ff.

(12) Gödel の『決定不可能性定理』を利用して、Lucas はこう言っている。計算機は、本質的に、形式的論理体系を組み込まれたものである。そうすると、整合的で初等数学のできるどんな機械にも、機械自身は証明によって真なりとし得ぬのに、体系の外に立ってこれを考察する我々は真なりとし得る式がある。それ故、いかなる機械も心の十全なモデルたり得ぬ（複雑になった果てに機械が Gödel 的限界を突破するのなら、そのとき働きにおいて機械はもはや機械でなく、心をもったのである。心の本質の問題と、心をもつものが誰の手で作られるかという問題とは、はっきり区別されねばならぬ）、云々。

もっとも話しはそう綺麗に済まぬ。Gödel は、もし形式的論理体系が整合的なら、その体系で決定不可能な式のあることを証明したにすぎぬ。しかも彼の第二の定理は、整合的な体系内でその体系の整合性の証明はできぬと言う。とすると Lucas の議論は宙に浮いていないか。これを地につける為に機械の整合性を証明しようとすれば、我々自身の整合性を証明せねばならず、さてその証明がもしできるとすれば、そのことによって、我々は不整合ということになりそうである。

だから Putnam は意識と機械との働きの本質的区別を否定して論ずる。任意の機械Tに対して我々のできるのは、ただ、『もしTが整合的ならばUは真である』ということを我々が証明できるような命題Uを見つけることである。この場合、もしTが実際整合的なら、UはTによっては決定不可能である。しかしTも『もしTが整合的ならばUは真である』ということは立派に証明できる。そして（整合性を仮定し）Tの証明できぬ命題Uは我々も証明できぬであろう、云々。

実は次の点が決定的なのである。即ち、『もしTが整合的ならばUは真である』ということをTが証明できるとするのは誤

りである。Tはこれと真理値の一致する別の式（命題）を証明できるのにすぎぬ。Gödel 数は決して名前や記述でない。件の別の式の扱う対象は数以外のものではない。式に数を対応させ、数に関する命題を式に関する命題に再解釈するのは、我々のすることである。機械にできるのは形式的証明である。この証明は、全く構文論的に、記号の意味を無視し、形だけを見て行われる。結果は『もしTが整合的ならばUは真である』と再解釈される。しかしこの意味論的作業は機械にできぬ（厳密に言えば、単に数に関すると解釈することさえできぬであろう）。

実際、『もしTが整合的ならばUは真である』ということの証明は、次のように意味論的に行われる。Uと『UはTの体系で証明不可能なり』とは真理値が一致する。しかるに実際Uは、Tが整合的なら、この体系で証明不可能。故にUは、Tが整合的なら真、云々。『真理値』は意味論的概念である。これを構文論的概念に還元することはできぬ。まさに Gödel の定理がそのことを示す。ひるがえって、だからこの定理は非形式的意味論的に証明されねばならぬ。その証明をし得る我々は、あらゆる形式的論理体系に通用する定理を手中にした。ここで我々は、単に任意の機械のみならず、一度に全ての機械に打ち勝っていると言い得よう（『真』ということについて対応説 the correspondence theory of truth を採るべきであるが、対象への意識の志向性がなければそれは全く了解不可能なものに思われるということも注意しておく）。

右の議論については、cf. Anderson (ed.), *Minds and Machines* (Englewood Cliffs, N. J., 1964).

（13） Chisholm, *Perceiving*, pt. Ⅲ, 10, pp. 151-6.

（14） Sellars, "Phenomenalism"; "Empiricism and the Philosophy of Mind": Chisholm & Sellars, "Intentionality and the Mental."

（15） 特に、cf. Chisholm & Sellars, "Intentionality and the Mental."

（16） cf. Chisholm, *Theory of Knowledge* (Englewood Cliffs, N. J., 1966), 6, p. 93; *Perceiving*, pt. Ⅲ, 9.
「見える」の用法は実はこう簡単に割り切れぬが、今はそれを無視する。cf. Chisholm, ibid., pt. Ⅱ, 4.

（17） Ayer, "The Terminology of Sense-data," Ayer, *Philosophical Essays* (London, 1954), pp. 92-3.

（18） Chisholm, ibid., pt. Ⅲ, 8, p. 120.

（19） Husserl, ibid., s. 375.

（20） 物理的対象に関る文を仮言文に還元するのは、堅固で持続的なものを、何か間歇的で稀薄なものによって置き換えてしまうことだと言う Berlin に私は同意する。これは単なる『感じ』の問題でなく、意味論上の問題である。cf. Ayer, *The Prob-*

lem of Knowledge (Baltimore, 1956), 3, pp. 120–2.

(21) Husserl, ibid., I, Kap. I, SS. 29–30.

(22) Husserl, ibid., Kap. II, SS. 74–76.

(23) Findlay, ibid., I, IX, pp. 30–1.

(24) Findlay, ibid., p. 31.

(25) Hume, *A Treatise of Human Nature*, bk. I, pt. IV, sec. VI.

(26) E. g., Russell, "Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description," Russell, *Mysticism and Logic* (London, 1917); *Human Knowledge* (London, 1948), pt. II, IV.

(27) Frege, „Sinn und Bedeutung", Frege, *Funktion, Begriff, Bedeutung* (Göttingen, 1962), S. 40, A. 2.

(28) 差し当り、cf. Quine, "Three Grades of Modal Involvement," Quine, *The Ways of Paradox* (New York, 1966).

(29) Strawson, "On Referring," *Mind*, LIX (1950).

(30) cf., e. g., Russell, "Knowledge by Acquaintance and Knowledge by Description."

(31) Russell, *Human Knowledge*, pt. II, IV, pp. 103–4.

(32) cf., e. g., Husserl, ibid., V, Kap. II, S.411 ff.: Findlay, ibid., I, IV, pp. 10–1.

(33) cf., Findlay, ibid., p. 11.

(34) cf., e. g., Russell, "On Denoting," *Mind*, XIV (1905).

(35) Sellars, "Phenomenalism," ibid., p. 95 ff.

（筆者　京都大学文学部〔哲学〕研修員）

Hume's theory of belief

by Tōichi Okamoto

This paper tries to cast some light on the positive and constructive side of Hume's theory of belief in tracing his analyses of the causal relation and of the existence of the world. Special attention is paid to his scepticism. This is, as it were, a double-edged sword drawn not only at rationalists' arguments but also at his own theory. He evades it by finally committing himself to the belief, based upon immediate experience, in human nature. After all Nature is what makes the subject and the object acceptable to each other, covering human reason as well as animal instincts.

Intentionality

by Shinya Kimura

Intentionality is not a mere linguistic fact. It is essential in mental acts. For why have we just intentional language ? Here I agree with Chisholm, who ascribes the intentionality of our language to that of our mind. Sellars' "direct realism", I think, conceals preposterousness and is untenable. To see the matter clearly we must get over Chisholm's argument, which is still too linguistic.

Indeed those who rejected the sense-datum theory have gone to the other extreme and regard "sense data" as fake. But the fact is that, though what appears to us is nothing but a physical object, yet it appears only via its various *appearances.* We should do justice to both of these points. It is concluded that, when we have a perceptual consciousness, we refer to or *intend* "something" via appearances, and this "something" is the object of our consciousness while the appearances are not.

This "something" is not a Meinongian "pure object". Strictly speaking, we *just* intend. But here, as it were, a pseudo binary relation is effected, one of whose "terms" is the "something". (My expressions may be mislead-

ing, but they are unavoidable owing to the structure of our language.) Again, the "something" is "primordially indeterminate". All its sensible determinations finally concern only its appearances. (There are other kinds of intentional acts than perception; these are expectation, memory, imagination, thought etc. Unlike perception, they do not require "sense data" as their "building materials".)

With intentionality we break out of the directly given. Russell is wrong on this point. My theory does not call in any queer object. Besides it could unify the perceptual world and that of physics, which Sellars separates severely.